

エシヤ書 第29章10～14節  
マタイによる福音書 第7章 7節～12節

説教 岡村 恒牧師

《求めよ、さらば与えられん》多くの人に引用され、しばしば〈誰でも熱心に探し、門を叩けば、確かなものが得られる〉と誤解されてきた言葉です。しかし、一人一人の救いに関しては、聖書は全く逆のことを言います。あなたが熱心に求めたから救いが与えられるのではない。あなたに目をとめ、あなたを憐れみ、あなたを愛して下さる神の、一方的な恵みによって救われる。それが聖書の語る福音です。それではこの御言葉は、私たちに何をさせようとしているのでしょうか？

主イエス・キリストは小高い山の上で、大勢の群衆に語られました。神が何を考えになり、何を私たちに与えようとして下さるのかを聖書から受け取って生き始めれば、あなたと神の関係のみならず、あなたと隣人との関係も変わる。道を行き交う知らない人との関係、あなたと全世界との関係すら変わる。神はかけがえのない存在としてあなたを愛しておられると語り合う新しい関係に変えられると。その中心にあるのはいつも、父なる神との関係です。聖書の語る、罪・赦し・救いは、神との関係の中で語られる言葉です。神との関係の破綻が罪であり、それが回復されることが赦しです。その喜びを与えられるときかけがえのないもの、六章から主イエスが語っておられること、それを一言でいうと《祈り》です。父なる神との会話です。「求めよ」「探せ」「門を叩け」は、いずれも神様との関係です。神に求め、神のみ心を探し、神の国の門を叩く話です。そうすれば与えられ、見出し、開けてもらえる。あなたを愛し、一瞬たりとも目を離さず、必要なものを全てご存じで、与えたくて手ぐすね引いている神に祈ってごらんということ。主イエス・キリストは、誰に向かって何を求めたらよいか、明確にお語りになっています。

《求めよ、さらば与えられん》本当のことを知っている者にとって、これほど慰めに満ちた言葉はありません。神に救いを求め、赦しを求め、永遠の命を求めてごらんなさい、求める者は得る。聖書はそう断言するのです。

「自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があるか。魚を求めるのに、へびを与える

者があるか。」(9、10節)現在、自分の子にすら良いものを与えられないという世界の現実があります。父なる神は、私たちが何を求めたらよいかわからずに、石を、蛇を求めても、パンを、魚を、なくてならぬ命を与えようと用意しておられる。だから求め、探し、門をたたいてごらん、そう主イエス・キリストは語られます。

私たちに神から自分で何かを得るような忍耐も熱心さもありません。だからこそ主イエス・キリストは地上に来て、神と私たちを結び付けて下さいました。誰でも神に祈ることができず。主イエス・キリストが来られたからです。私たちが願うことは、神の計画が実現するという、私たちの願いよりはるかに素晴らしい形で実現します。一方的な贈り物として。

今日の御言葉には続きがあります。「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である」(12節)は、黄金律(ゴールデン・ルール)と呼ばれ、聖書全体がそこに集中する言葉です。この御言葉もよく誤解されますが、道徳・倫理の次元ではありません。「だから」がその前に付いています。あなた方の父が、祈ることすらできない私たちに、はるかに良いものを与えて下さる、「だから」隣人に対してももっともよいものを分かち与えたらよい、一緒に神の愛を受けたらよい。そう聖書は語ります。

そして主イエス・キリストはそれを実践し、誰一人そこからはみ出さないことを具体的に示されました。主イエス・キリストは私たちに祈るようお勧めになり、その祈りは聞かれると宣言されました。私たちがともに礼拝にあずかるのも、そこに理由があります。神が与え続けて下さるものを一緒に味わい続けたらよいと、主イエス・キリストが勧めて下さるからです。

求め・探し・門を叩き続けたらよい、祈りをやめなくてよい、あふれる恵みを受け続けたらよいと力強く主イエス・キリストは勧めておられます。安心して、求め・探し・門を叩き続け、与えられ・発見し・門に入れられていきましょ

(記 説教要約奉仕者)